

# あなたの生活に 文学を

阿部 公彦



あべ・まさひこ 1966年横浜市生まれ。英ケンブリッジ大で博士号取得。英米文学者東京大教授。文学を「監視する」でサントリー学芸賞。著書に「善意と悪意の英文学史」「史上最悪の英語政策」など。訳書にマラマッド「魔法の樽」など。

今、やる気満々で私はこの連載を始めようとしているのですが、その眼前にはこんな問いが立ちはだかります。「ふつうに生きていくなら、『文学』なんか必要？ カッコイイ比喻とか、よくわからん結末とかいる？」

なるほど。まずはこの問いに答えねばなりません。たとえば「ふつうに生きていくなら」とは何でしょう。安全な人生か。何も起きないことか。死ぬまでぜんぶ「ふつう」という人はいるでしょうか。生きていくと「しまった！」とか「あー」とか思う。「むう」とうなったり、ズドンと興奮したりする。私は強調したい。文学がヒビと潜み笑いをもらって喜び寄るのはそこだ。

あなたの生活が、ほんの瞬間、何かちがうものに見える。語るべき何かに変わる。文学は「語るべき何か」の集積です。そこに熱気が生まれ、そんなに言うならちよつと話をうかがいますよ、となる。「語りたいたい」だけでも「聞きたい」だけでもない。両者が交わる「場」があるから文学は生きる。この連載もそんな「場」の一部でありたいです。取り上げるのは活字になった作品ですが、聞こえてくるのはみなさんの声です。

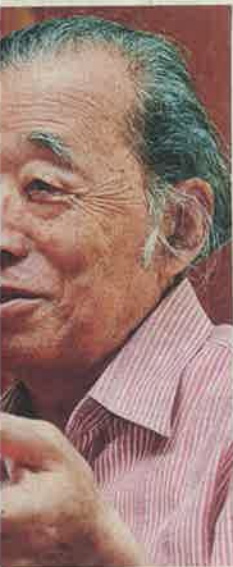


絵・片山高志

## 「琉球弧の運動」つなぐ軸に

計報に接して、心に激動が奔り、同時に、学慮の数々が一挙によみがえった。新崎盛暉さん

新崎さんは、沖縄戦後史における画期を50年代の「島ぐるみ闘争」で示した。



新崎さん=2015年

2004年に、その地域研究所が主催する「沖縄から見えてくること」というシンポジウムで一緒に話した時に「わたしは沖縄を研究対象だと考えたことはない」「わたしの前には、解決

## 高橋弘希「送り火」

今月、「コンビ二人間」の著者が帰ってきました。村田沙耶香さんの久々の新作は「地球星人」（「新潮」5月号）。しかし、これは「コンビ二人間村田」よりは2014年の作品の「殺人出産村田」に近いでしょう。

## 「わたしは変だぞ」臭が漂う

阿部公彦さんが月単位で現代文学について寄稿します。えよう。

## 妙な冷たさと暴力的鋭さ

高橋弘希の文体は一見古風です。伝統的な小説によく見られる枯淡の境地。どこかひんやりとした情緒。でも、一抹の違和感があります。文章の風情の向こうに、情緒とちがう妙な冷たさを感じられる。

## 今村夏子「ある夜の思い出」

今村夏子さんの「ある夜の思い出」（「たべるのがおそい」vol.5）も、主人公の「わたしは変だぞ」臭がぶんと漂う作品です。「わたし」は生活不能症。ある夜、父に打撃されて逃げるように家を出て空腹とともさまよっている。ひげ面の男と知り合いの奇妙な家に連れていかれます。筋書き的には奇譚です。



かたやま・たかし 1980年岡山市生まれ。画家。2011年VOCA展に出品。15年ノルウェーで滞在制作を行う。「西脇市サムホール大賞展」で大賞、「ACRYL AWARD 2006」で秋山孝賞を受賞。

で「工場」の部品なのだ、と彼女は訴える。男女の関係を持つ気になれず、夫とは偽装結婚。やがて原始共同生活に入る。最後はこの共同体の男女がお互いを食べ始めます。

## 盲剣楼奇譚

島田 莊司・作  
尚田屋 愉一・絵

五 鍛錬 (二)

「自分ももとは侍の出ですが、刀の方はほとんど駄目でござった。医師の方を少々やり申したが、全然ものになりません。しかし戦になるなら、それがし一命は捨て申す。足手まといにはなり申さん。どうか、加勢の方をひとつ、平に……」

「あなたは天狗だ」  
遠くから嘖々とした声がかかった。  
「わたしは根っからの百姓で、刀の方は全無駄目だが、芋を作ったら誰にも負けねえ。土には心がある。作物が育つ年と、頑張ってもまるきり駄目な年がある。よう穫れる年は、植付けのにおりに、畑の端に天狗が立つんだ」



「わたしには見えるんだよ天狗が。あんたはこの村の救いの神だ。あんたが来たから、あんたさんがおつてくれたら、この村は続くよ、わたしには解るよ」

彼がそう言ったら、これが始まりの合図だったように、爆発的に村人たちの声が湧き起こった。

# 公平性が問われています

## 守られていないのが現状です



マイケル・ジャクソンの「HUMAN NATURE (ヒューマン・ネイチャー)」というヒット曲を「存じてしよつか? 私も大好きな名曲です。マイケルは生前、インタビューで「自分は有名だが夜ふと寂しくなって街にでて誰かと話したくなる」と話したそうですが、スターでありながらも普通に人と触れ合いたいという彼の心底を投影した曲なのかもしれませんね。現代は会員制交流サイト(SNS)が発達し、その気になればフェイスブックやツイッターで多くの方々とつながることが出来ます。それはそれで素晴らしいのですが、さて一生のうちに何人の方と生身で、物事を共有できるのだらうかと思つと、そのような機会は実は限られている気がします。

### 瀬戸内の青に響くうた

MUSIC BLUE

先日、高松市内の商店街で「アスパラ大騒ぎ」というお祭りがあり、私も演奏で参加しました。6回目のお祭りを「参加している皆さん自身が楽しむ姿は本当にいいな」と思いました。私たちの事業で、食のコーディネートで一緒にいただいている友人が音頭をとったのですが、彼女の思いに共鳴して食の店舗のみならず、ミュージシャンやワークショップの方々が、それぞれの表現で参加していました。そこには、参加者の気持ちの共有が外へと伝わっていくというとても自然な気配があつて、その場はとても居心地の良いものでした。「ヒューマン・ネイチャー」

### 心の触れ合い



昨年の「高松ミュージックブルーフェス」。多くの人が軽快な音色に足を止めて聴き入った

という言葉通り、人間は自然の一部。生身の人間同士の心

6の両日に開く「高松ミュージックブルーフェス2018」

の触れ合い。2日には実行委の主催で「学校公演」も予定しております。子どもたちに普段触れることのないタイプの音楽を体験してもらおうと考えています。また、「自由を歌おう」をテーマにした今年のフェスには音楽療法グループ「WALKS」も出演します。ハンディキャップのある人たちが奏でるロックンロールにも触れてください。63組約400人のミュージシャンが参加する高松を音楽が包む2日間、街に増えた外国からのお客様にもぜひ、この街を楽しんでいただきたいと思います。

## 気持ちは外へ伝わっていく

文化

# 潜み笑いで忍び寄る

あなたの生活に文学を

英米文学者 阿部公彦

今、やる気満々で私はこの連載を始めようとしているのですが、その眼前にはこんな問いが立ちだかります。「文学」に生きていくなら、『文学』なんか必要? カッコイイ比喩とか、よくわからん結末とかある?」

ひんやり

なるほど。まずはこの問いに答えねばなりません。たとえば「こんなふうな」「こんな」とは何でしょう。安全な人生か。何も起きないことか。死ぬまでせんと「ふう」という人はいるでしょうか。生きていくと「しまった」とか「きゃっ」とか思う。「むう」とつなったり、ブドーンと興奮したりする。私は強調したい。文学がヒビと潜み笑いをもち、忍び寄るのはそこだ。

あなたの生活が、ほんの瞬間、何かちがうものに見える。語るべき何かに変わる。文学は「語るべき何か」の集積です。そこに熱気が生まれ、そんなに言ひならちよっと話をうかがいますよとなる。「語りたいだけでも聞きたいだけでもない。両者が交わる

### 情緒とも違う冷たさ — 高橋

高橋さんの文体は一見古風です。伝統的な小説によく見られる枯淡の境地。どこかひんやりとした情緒でも、一抹の違和感があります。文章の風情の向こうに、情緒ともちがう冷たさを感じられる。その正体はたぶん「小説であること」の罪そのもの。最後の最後でそれがあばかれ、罰せられます。刃物が頻出する物語は、展開も暴力的に鋭利。唯一、結末の「謎解き」が「すべてに覆されるにしても」作品の「えぐみ」をやや緩和し話がわかりやすくなりますが、とにかく強烈な作品です。

こだわり

今月、「コンピ二人間」の著者が帰ってきました。村田沙耶香さんの久々の新作は「地球星人」(「新潮」5月号)。しかし、これは「コンピ二人間村田」よりは2014年の作品の「殺人出産村田」に近いでしょう。

主人公の奈月は「魔法少女」宣言をするくらいで、どこか周囲から浮いている。塾での性的虐待。周囲の無理解。奈月はセクハラ講師に復讐します。殺してしまうのです。ええ、それはさすがに……と思う。ただ、そこには彼女の世

### 世界に対する違和感 — 村田

界に対する違和感がからみまします。人間は生殖器そのもので「工場」の部品なのだ、と彼女は訴える。男女の関係を持つ気になれず、夫とは偽装結婚、やがて原始共同生活に入る。最後はこの共同体の男女がお互いを食べ始めます。私にとって村田さんは謎多き作家です。彼女の作品に見られる生殖・殺害への執拗なこだわりがよくわからない。でも、ここまで語るからには、とも思う。ぴんとこないからこそ、その向こうの何かが気になる。

狭い一点

今村夏子さんの「ある夜の思い出」(「たべるのがおそい」vol.5)も、主人公の「わたしは変だぞ」臭がぶんぶんと漂う作品です。「わたし」は生活不能症。ある夜、父に打撲されて逃げるように家を出て空腹とともにさまよっていると、ひげ面の男と知り合い奇妙な家に連れてい

あべ・まひひ 1996年横浜生まれ。英ケンブリッジ大で博士号取得。東京大教授。文学を「監視する」でサントリー学芸賞。著書に「善意と悪意の英文学史」「史上最悪の英語政策」など。訳書にマラマッド「魔法の樽」など。



絵・片山高志

に朝... 原因... 時計... している... ための... 中で... ます... が... とき... 出て... じ時...